

## 「テキストとイメージを編む」に寄せて

本書は日仏両国の間で行われた挿絵本を中心とした出版の文化交流史に関する優れた研究書である。2012年秋に道立近代美術館で行われた「藤田嗣治と愛書都市パリ」花ひらく挿絵本の世紀」の展覧会（北海道新聞社共催）と、それに併せて同年10月に開催されたシンポジウム「両大戦間パリの挿絵本文化をめぐって」などの成果を盛り込み、執筆陣には札幌や函館の学芸員も名を連ねている。

巻頭に編者の林洋子が語るように、乳白色の裸婦画で知られる藤田嗣治は、多くのフランス語の本に挿絵を描いていた。本書でも間瀬幸江が、シロドウと藤田が協働した「イメージとのたたかい」（1941年）について論じている。芳賀徹「『画文交響』のたのしみ」が綴るように、私たちが日頃目にする新聞小説には必ず挿絵があり、近代小説も多くは挿絵入りであった。本文だけを文学として問



## 挿絵通じ日仏交流史解明

題にするのは、不自然な仕方に見える。またル・ストウム「日本からの教示」が示すように、浮世絵を始めとした日本の多色木版画が、フランスの挿絵美術に多大な影響を与えたことも、一般にはよく知られていない。本書は、挿絵本と日仏関係という二つの学際領域に挑む意欲作である。

構成は「第一部 媒体としての書物—文化を越えて結ぶかたち」、

「第二部 場としての書物—テキスト、イメージ、媒介者」の二部に分かれたれ、第一部では江戸時代から明治にかけての日本の出版文化の展開と、近代におけるフランスと日本相互の影響についての論考が並ぶ。近世において読本・草双紙など板木を用いた絵入り本が盛況を極め、明治30年代まで続いた（高木元）。近代に入ると、それを活字印刷に展開するための試行錯誤が行われ（石切信一郎）、来日したビゴーは、小林清親と組んで「団珍園」に風刺画を発表した（清水勲）。他方、19世紀末フランスでは日本流のちりめん本（和紙を縮細状に加工した挿絵本）が盛んに出版され（大塚奈奈絵）、鳥の挿絵がジャポニスムとして流行した（吉川順子）など、知られざる事実が解明される。

第二部はより専門的に、両大戦間に開花したフランスの出版文化を、特に挿絵本に着目しつつ論じたセクションである。まず小林茂が日仏の相互影響を前提に、方法論と現状、それに課題をまとめて

いる。続いて先述の間瀬論文のほか、SF作家ウエルヌと編集者エツツェルにまつわる演劇・舞台との関わり（石橋正孝）、出版人ダラニエウスの関わった挿絵本『タブロード・ド・パリ』と『パリ1937』について（柳沢弥生）、一連の挿絵本『ダフニスとクロエ』に見られるギリシャ古典への回帰（佐藤幸宏）などをめぐる論考が並ぶ。

最後に編者の一人マルケの「出版文化の日仏交流をふりかえって」が触れるように、この分野の日仏関係は長い蓄積があったがあまり顧みられることがなかった。本書の刊行を契機として、単に文学でも美術でもない総合的な感性の発露としての挿絵本について、広い視野から関心を持つようにしたい。私たちは誰も、絵本を読んで育ったのである。本書でものが、本論で扱われる草双紙やフランスの画文集などの写真を口絵にカラーで掲げ、まさに「交響」するイメージを大事にするように造られている。何よりも見て（読んで）楽しい、そのような対象を思い起こさせてくれる貴重な一冊である。



（なかむら・みはる—北大大学院文学研究科教授・日本近代文学、比較文学、表象文化論）

林洋子、クリストフ・マルケ編「テキストとイメージを編む」出版文化の日仏交流」は勉誠出版刊、5184円。